

武蔵国分寺跡資料館だより

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum Newsletter

編集・発行・印刷

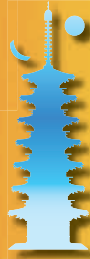
見る / 学ぶ / 訪ねる

武蔵国分寺跡資料館

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum

【住所】 〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10
【電話】 042-323-4103 【FAX】 042-300-0091
【E-mail】 museum@city.kokubunji.tokyo.jp
【HPアドレス】
http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/shisetsu/1733/009819.html

2013.9
第15号



平成の国分寺造営 — 古代窯業の里 鳩山町との連携 —

● 鳩山窯跡群

鳩山窯跡群（南比企窯跡群）は、現在の埼玉県比企郡鳩山町に所在する東日本最大級の古代の窯業遺跡です。武蔵国分寺跡で出土する瓦の生産地としては、南多摩窯跡群（東京都稲城市、八王子市他）、東金子窯跡群（埼玉県入間市）、南比企窯跡群が知られていますが、創建期の瓦の約8割は鳩山窯跡群産で、このことから国分寺の造営に際しては、膨大な量の瓦が鳩山で生産され、約40 km離れた武蔵国分寺跡まで運ばれたこととなります。

鳩山町付近の比企丘陵では良質な粘土が豊富に採取され、丘陵の地形は、登り窯を作るのに適していました。鳩山は6世紀初め頃より、まず須恵器の生産地として栄え始めます。須恵器とは、5世紀に朝鮮半島から伝った、ねずみ色の硬く焼きしまった焼き物で、古墳時代から平安時代にかけて使用されました。作り方の特徴として、ろくろを使用し、約1000度以上の高温で焼成された点

があげられます。鳩山は焼き物を生産する環境が整っていたため、須恵器の工人たちが住み始め、工人による集落も形成されるようになりました。

6世紀半ばに百濟より仏教とともに寺院建築の様式・技術が伝来すると、畿内を中心に各地で瓦を使用した寺院や役所が造営され始め、瓦の需要が高まってきます。瓦の生産は当時の最先端技術であり、百濟より瓦博士が派遣され、その技術を伝えたとされています。既に須恵器の生産技術を持っていた鳩山の工人集落は、その技術と窯を転用して瓦の生産を手掛けるようになり、7世紀後半には、瓦の量産体制を確立して、武蔵国内の初期寺院の瓦を供給しました。やがて8世紀中頃に奈良時代最大の国家事業であった国分寺の建立が始まると、鳩山は、武蔵国分寺の瓦を大量に生産し、武蔵国最大の国分寺瓦生産地となったのです。



武蔵国内の主要窯跡群



新沼窯跡（南比企窯跡群）12号窯



新沼窯跡で発見された国分寺瓦

● 平成の国分寺造営

平成 25 年度、鳩山町と国分寺市は、かつての瓦生産地（工房・窯）と供給先（武蔵国分寺）という繋がりを活かし、「平成の国分寺造営」として、連携して事業を進めることとしました。事業の概要は、鳩山町で瓦を製作し、製作した瓦を国分寺市まで運び、それを史跡武蔵国分寺跡の整備工事に活用しようというものです。都県域を超えた自治体の連携は珍しいことですが、もともとは同じ旧武蔵国。その縁を復活させて、文化財を通じた市民交流、地域交流を図ろうという試みです。

① 古代の技法による瓦作り

平成 25 年 8 月 31 日（土）に、「市外文化財めぐりー武蔵国分寺の瓦生産地をめぐり、古代瓦を作るー」（主催：国分寺市教育委員会、協力：鳩山町教育委員会）を実施し、国分寺市民 46 名（市長、教育長も同行）とともに鳩山町を訪れ、鳩山窯跡群の見学と、鳩山産（発掘調査により発見された粘土採掘坑から採取）の粘土、古代の技法による瓦の制作体験を行いました。



大規模な国分寺瓦窯跡である新沼窯跡の発掘現場では、鳩山町学芸員による丁寧な説明があり、内部構造が一目瞭然にわかるダイナミックな窯跡を目の当たりにして、参加者から感嘆の声があがりました。



新沼窯跡の見学

瓦作りの工程を当日の写真とともに見ていきましょう。



1. たたら（四角い粘土のかたまり）を作る。
2. 糸を用いて板状に切り出す（スライスする）。



3. 成形台に乗せ、叩き道具を用いて厚さを均一にする。



4. 受け台（鳩山町ボランティアの発明）に載せ、印に合わせて竹べら、糸などで縁を切りそろえる。



5. 名前や言葉を書き入れたり、刻印を押す。



6. 完成した 122 枚の瓦。1 か月以上乾燥させて焼成を待ちます。

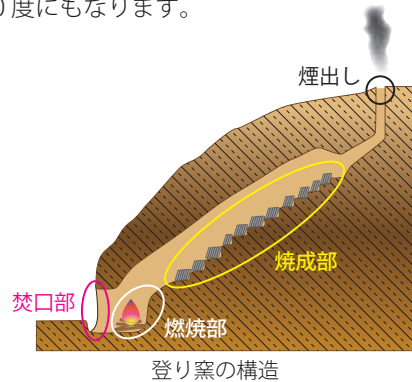
今回のイベントの全般に渡って、数カ月前からの復元道具製作、粘土の準備、当日の会場設営、丁寧な解説・指導、後片付けまで鳩山町の職員とボランティアの方々に大変お世話になりました。熱心な鳩山町の方々の姿に触れ、参加した国分寺市民も一生懸命、楽しく瓦作りを行い、合計 122 枚もの瓦が出来上がりました。

国分寺市と鳩山町の連携の第一歩を、市民と町民の共同作業からスタートできたことは大変意義深かったと思います。

なお、9月21日（土）には、鳩山町主催による同内容の古代瓦作り体験教室も実施されました。

② 瓦の焼成

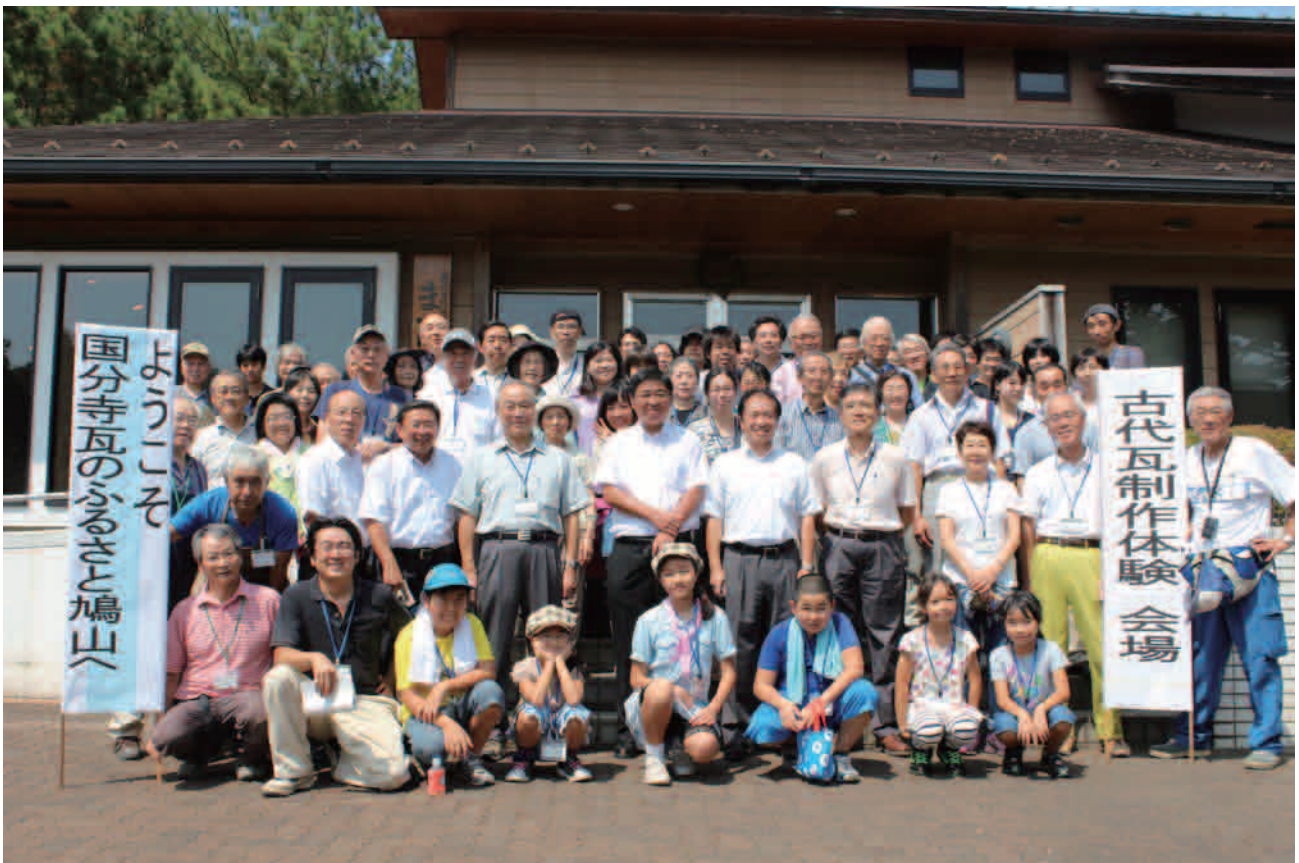
瓦を乾燥させた後、10月19日（土）・20日（日）に鳩山町の復元古代窯にて瓦の焼成を行う予定です。安全のため構造材には耐火レンガが使用されていますが、内部空間は古代の窯を復元して作られており、窯の温度は約 1200 度にもなります。



登り窯の構造



復元古代窯（後方から）



8月31日全体集合写真

③ 瓦の運上(うんじょう)

製作された瓦を、古代の人々は徒歩で背負って運んだ(運上)という記録が残っています。今年は、それを再現し、鳩山町民が古代の衣装を着て、国分寺市まで瓦を運ぶイベントを実施します。

11月2日(土)のはとやま祭(鳩山町の市民まつり)にて出発式を行い、武蔵国分寺跡を目指した一行は、11月4日(月)の国分寺まつりの歴史行列に参加します。そして国分寺まつり会場中央のステージで、瓦の受け渡し式を行う予定です。また、はとやま祭、国分寺まつりでは、それぞれ古代業葉の里鳩山町と武蔵国分寺跡をもつ国分寺市をPRするブースを出展し、市町間の交流を図ります。



瓦運上の様子(平成8年国分寺まつり)

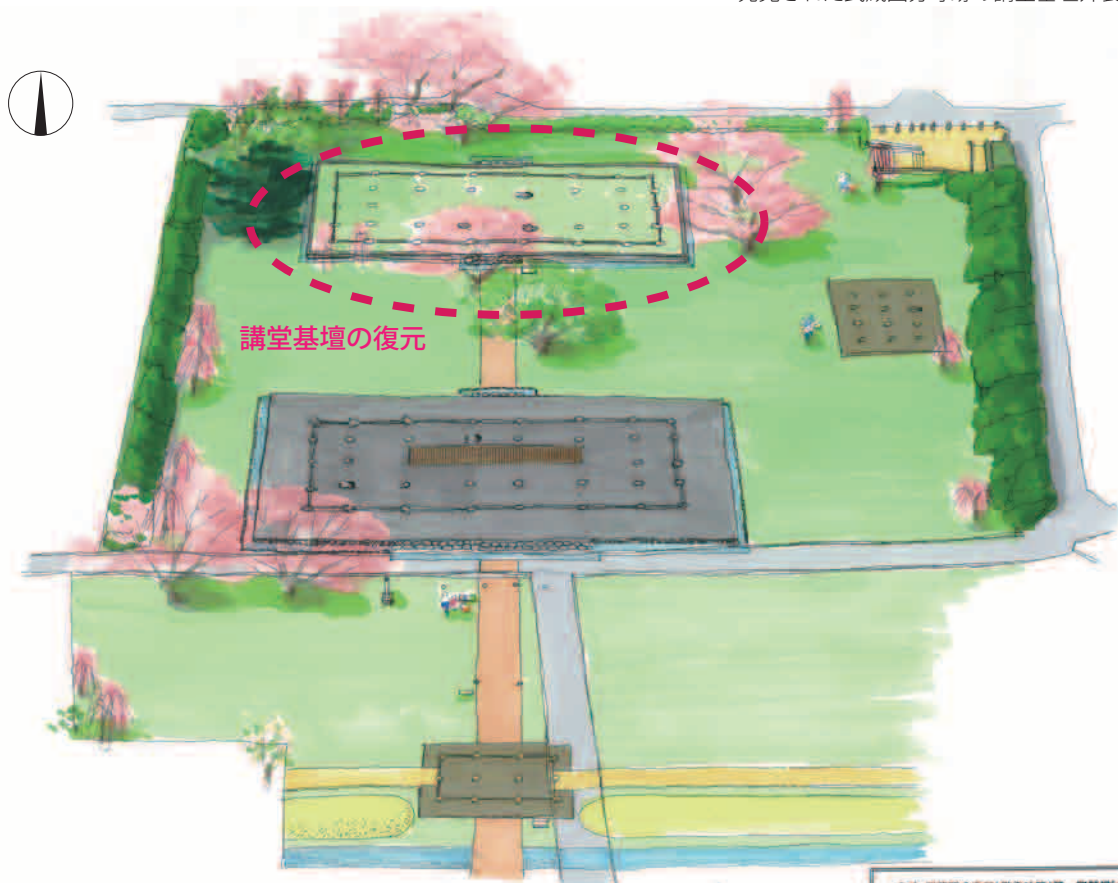
④ 史跡整備への活用

史跡武蔵国分寺跡では、平成23年度より中枢部分の整備工事に着手しています。平成25年度は、国分寺の主要建物である講堂(経典の講義などが行われた建物)の基壇(建物の土台部分)を復元整備する予定です。講堂の基壇は瓦を積んで装飾した外装であったことが発掘調査によって判明しています。整備工事において、その瓦積の基壇外装を復元するのですが、その一部に国分寺市民ならびに鳩山町民が作った瓦を使用する予定です。平成26年度以降も、継続的に、鳩山町から供給された瓦を史跡整備に活用していく予定です。

(野中 太久磨)



発見された武蔵国分寺跡の講堂基壇外装



史跡 武蔵国分寺跡(国分寺地区)第一階段(中枢地区)基本設計
イメージベース: 中枢地区鳥瞰図 平成23年5月

普段何気なく暮らしている私たちの生活は、いつの時代でもその時々環境に適応した快適さが求められ、古くからの伝統的な生活様式は、常に変化を余儀無くされています。このようななかで、私達の国の歴史や文化を正しく理解するために、なくてはならない様々な文化財は、その多くが生活の変化とともに失われつつあるのが現状です。そのため、国分寺市教育委員会では、将来の文化の向上・発展の基礎となり、国民共有の貴重な財産でもある文化財の適切な保存と活用を図るため、市の区域内に存する文化財の所在及び現状について調査を行っています。ここでは、最近実施した文化財調査のなかから、特に注目すべき貴重な成果が得られた事例をご紹介します。

ふるさと文化財課の事務所が所在する市内西元町地区には、お鷹の道や元町通りに沿って古くからの佇まいを留める民家が、現在も数軒建ち並んでいます。市教育委員会は、昭和63年度に専門の調査員による民俗調査団を編成し、江戸時代の旧村を単位とする地域別の総合民俗調査を行うなかで、平成元～7年度にかけて市内全域を対象とする民家調査を実施し、その成果は平成8年に『国分寺市の民家』と題する調査報告書を刊行しました(現在、同書は絶版中で、市内の各図書館等で閲覧する

ことが出来ます)。報告書では、当時の調査でご協力を頂いた19軒の民家を掲載していますが、同書刊行後17年が経過した平成25年現在では、今でも残る民家は10軒と、約半数近くが諸般の事情からこの間に消失してしまったことが判明しています。

ここに取り上げる事例は、同報告書で「六間取りの大規模民家—金子忠男家(国分寺村本村)—」として紹介されている民家です。屋敷地は、都名勝真姿の池湧水群と国史跡武蔵国分寺七重塔跡に挟まれた、元町通りの南側に位置しています。主屋は東北東を向き、屋根は寄棟系兜造りの瓦葺き、その規模は間口10間、奥行5間の総二階造り、建築に際しては持山の木を伐って、明治10年代の半ば頃に完成したと伝えられています。同家では、このほど古い家屋を解体し、新たに賃貸住宅を建設する運びとなったため、所有者であるご家族・関係者の皆様方の多大なるご理解とご協力のもと、今年3～6月に文化財調査を実施しました。

なお、同家は、昭和51～53年度に国分寺市史編さん委員会が行った古文書調査で、江戸時代(宝永年間)以降の国分寺村に関連する資料を多数保有し、これらの資料は「金子忠男家文書」として、981点の古文書と12点の写真が『国分寺市史料目録』I・III(昭和54年・



主屋・内蔵解体前の現況(南東から)

平成6年刊行)に収載されていて、特に大正8～昭和2年に国分寺村の助役・村長を務めた金子両右衛門を輩出した家系であることから、当時の行政文書がとても充実していることが知られています。また、平成元年度に行った民俗調査でも、旧国分寺村域に伝わる様々な習俗の担い手として聞き取り調査にご協力を頂き(その成果は、『国分寺市の民俗二ー国分寺村の民俗一』平成4年刊行で紹介)、同家が所有する古文書と農機具を中心とした民具の一部は市教育委員会に寄託され、現在、本多5丁目の民俗資料室で保管しています。

今回の調査は、家屋の解体に先立ち、同家が所有する古文書と民具の追加調査、および旧家屋主屋・内蔵・外蔵等の測量調査を3月、家屋解体作業の立会いを4月、家屋主屋の基礎調査と埋蔵文化財の発掘調査を5～6月前半に実施しました。それぞれの調査成果の概略について、順を追って記します。

まず、古文書調査では、今回、約1,200点余りの資料が新たに発見されました。現在、詳しい内容は解読中ですが、このなかで、旧主屋を建築した当時(明治14・19年)の普請帳が確認されたことは特筆されます。「普請帳」とは、家を建てる際に必要な諸経費を書き上げた出納帳のことで、半紙を長手方向に半折して綴じたものが多く、上書きは「普請諸入用」・「新築入用覚」など、色々な名称が付けられています。建物の建築年代がわかるとともに、材料や人工の調達状況など、工事の詳細な内容まで知ることが出来るとても貴重な資料です。その他、襖等の建具の反故紙として、古文書が多用されている状況も確認されました。

民具調査では、糸車など養蚕のための道具、唐箕や鍬などの農具、講中で使用した膳椀類など、約120点の資料が収集されました。同家では、冠婚葬祭等の祭事には地域の人々を招いての会食が度々催されたようで、膳椀を収納した木箱を幾つも保有していましたが、そのうちの一つには、家屋の建築年代よりも古い嘉永6(1853)年の墨書銘が確認されます。また、座繰り糸巻機の台座裏面には、金子両右衛門が所沢村の亀屋という店舗から大正11年にそれらを新調した墨書きがあり、この頃、同家では養蚕業を盛んに営んでいた様子も明らかになりました。

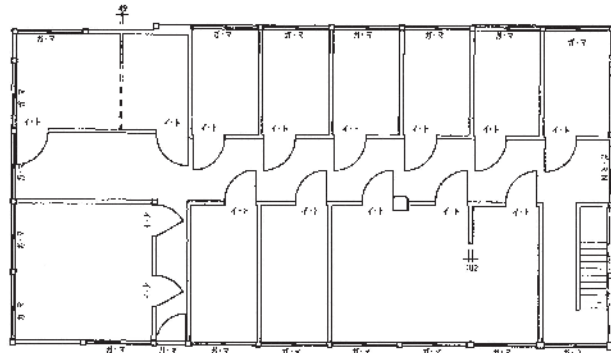
旧家屋(主屋・内蔵)の測量調査は、国分寺市文化財保護審議会臨時委員の藤井恵介先生(東京大学大学院工学系研究科教授・建築史学)に依頼し、3月8日、同研究室の学生6名の応援を得て行いました。解体前の現況家屋は図1に示したとおりで、一階北東隅が玄関(元ダイドコロ)、その南側は表(東)面にザシキ・ロクジョ

ウ・ハチジョウの三室、裏(西)面にカッテ・ヘヤ・オクの三室が並び、玄関北側には外から出入りするモノイレがありました。また、主屋南側には漆喰の美しい装飾を施したウチグラが建ち、主屋と内蔵を接続して茶室があります。玄関・居室部の境には40cm角の檜の大黒柱と中柱が建っていて、オク西面にはトコノマを設けています。オクとハチジョウは棹縁天井を張り、長押を廻しているのに対し、ザシキ・ロクジョウ・ヘヤは根太天井で、玄関廻りとザシキ・ロクジョウ境、ザシキ・カッテ境には差鴨居を入れています。北側を除く三辺は縁(側)が廻り、外側内法上に鉄格子を設け、その下はアルミサッシのガラス戸で、当初はトタンで覆われた雨戸を入れて防犯・防火を図っていました。

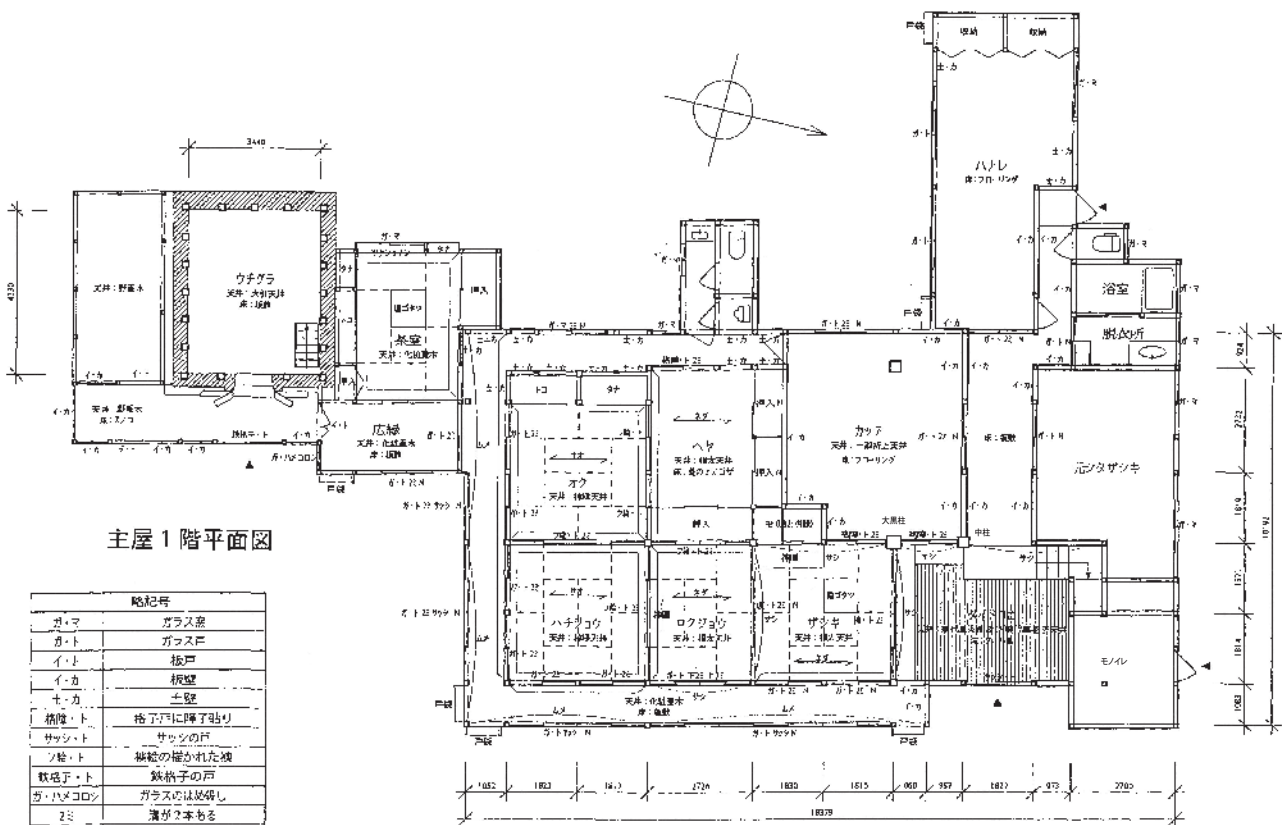
建物は当初茅葺屋根で、その後、この地域では比較的早い時期にトタン葺きに変えたと伝わっています。戦前まで養蚕の蚕室に使用された二階は、昭和34年頃に下宿を開業するにあたって建物全体を大きく改造し、屋根はトタン葺きから棧瓦葺きへ、それまで一室空間だった二階は間仕切りを設けて15の小部屋に分割し、玄関から裏側まで通っていた一階土間には床が張られました。さらに、その北側のカマドがあった元シタザシキも床を張り台所に変え、囲炉裏があったカッテも囲炉裏を埋めて内装を施し、裏側(西側)に間仕切りで仕切られた縁は室内化しました。また、カッテの裏側に続いていた風呂を壊し、寝室として使用された突出部(ハナレ)を増築しています。裏側中央部に突出して便所を増築したのもこの時期です。なお、居室部の五室には改造は行われなかったようです。その後、昭和56年に玄関の床にタイルを張り、出入口の建具を雨戸付け障子からガラス戸に変更し、天井・壁を改装して現在に至った模様です。

なお、これらの主屋・内蔵・外蔵は、4月に解体作業が行われましたが、その際、主屋の小室裏から棟札や祈禱札等の木札類を回収しました。そのうち、棟木に釘で打ちつけてあった木札は、発見当時は囲炉裏の煤で表面全体が燻され、肉眼では判読出来ませんでした。東京学芸大学文化財科学研究室の服部哲則先生(保存科学)のご協力を得て赤外線カメラを当てたところ、明治15年2月に身延山久遠寺の奥院七面山で書かれた棟札でした。普請帳と棟札の発見によって、ほぼ聞き取り調査の通り、明治10年代に建築された古民家であったことが判明しました。

家屋解体後、建物の基礎調査および敷地内で武蔵国分寺に関わる古代の遺跡の広がりを確認する目的で埋蔵文化財の発掘調査(確認調査)を行いました。敷地西側隣接地の道路上では、昭和53年にも一度、下水道管の敷設に伴う緊急の発掘調査が行われていて(武蔵国分寺跡

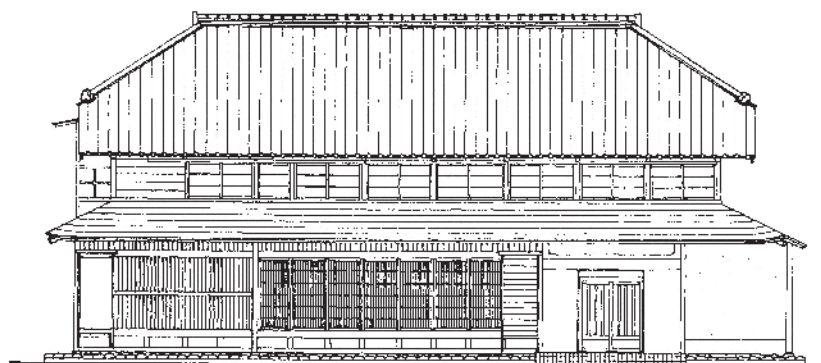


主屋2階平面図



主屋1階平面図

略記号	
ガ・マ	ガラス窓
ガ・ト	ガラス戸
イ・ト	板戸
イ・カ	板壁
セ・カ	土壁
格障・ト	格子戸に障子貼り
サツ・ト	サツシの戸
フ給・ト	縁起の福かれた襦
鉄格子・ト	鉄格子の戸
ガ・ハメロン	ガラスのはめ込み
ニ	溝が2本ある
三	溝が3本ある
N	比較的新しいと判断される



主屋西側立面図

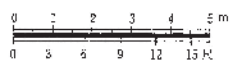


図1 西元町三丁目所在旧家(金子家) 解体前主屋の現況測量図

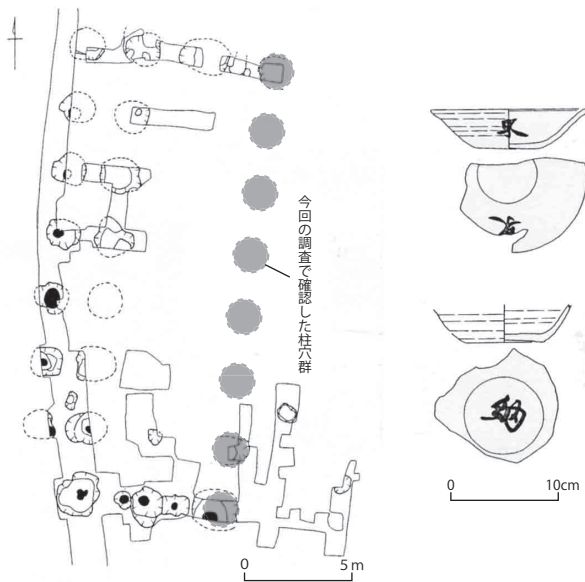


図2 「大衆院」に比定される古代の大型掘立柱建物と出土遺物
(国分寺市遺跡調査会 1994『武蔵国分寺跡発掘調査概報X』を一部改変作図)

第87次調査)、掘立柱建物を構成する柱穴群が規則的に並列している状況が確認されました。この柱穴群は、同家宅敷地内にも広がる事が予測されたため、調査した当時、家主様のご協力を得て庭先に追加の発掘調査区を設けたところ、西側に廂が取り付く桁行7間×梁行2間に及ぶ古代の大型掘立柱建物である可能性が高いことが判明しました。さらに、この建物跡は、8世紀後半～10世紀代の長期にわたって幾度かの建て替えした形跡があり、「納」・「東」と書かれた墨書土器が出土し、講堂・金堂等の主要伽藍建物の東側至近距離に位置すること等から、寺院の寺務を司る大衆院と呼ばれる建物跡と考えられています。今回の調査では、この建物の東側部分に相当する柱穴列を確認し、昭和53年の調査成果と合わせて建物の全貌が明らかになった他に(図2)、同時代の竪穴住居や掘立柱建物、中世の墓壇群なども発見されました。なお、古代の遺構については、所有者の方のご理解とご協力のもと壊されず、新しい住宅の地下に保存されています。

主屋の基礎部分については、既存家屋が礎石建ての建物であったため、解体業者の方には柱を据えた礎石はその位置のまま、極力動かさないよう協力をお願いし、上物解体後、礎石の分布・測量を行うことから始めました(写真①)。多くの礎石は漬け物石ほどの大きさの河原石でしたが、大黒柱や中柱など、主要な部屋を仕切る柱の下部には切石製の礎石が用いられ、さらに、礎石の下部には礎石を据え付けるための基礎地業が各所で施されていることも判明しました。この基礎地業は、直径1m前

後の円形で、深さ80cm程の掘り方を持ち、その中に根石や割栗石を敷き、ローム土と黒土を幾重にも版築して強固な地盤を形成しています(写真②)。これは図3で示したように、長さ10～13尺、直径8寸～1尺程の木の真棒に複数の綱を巻き付けて、やぐらを組んで真棒を垂直に固定し、滑車を使って人夫たちが綱を引き合いながら真棒の重みで地面を搗き固めた痕跡で、「石場つき」などと呼ばれる基礎工事の方法です。このような工事は、昭和20年代までは全国各地で見られた建築現場の作業風景でしたが、コンクリートの布基礎やランマー



写真① 主屋解体後の基礎状況(南東から)



写真② 大黒柱据え付け状況(南から)



写真③ 古代瓦を転用した囲炉裏の跡(南から)

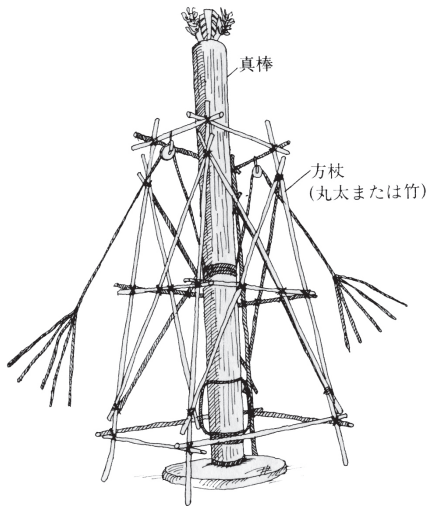


図3 「石場つき」に用いられた真棒とやぐら
(吉野正治1986『民家をつくった大工たち』学芸出版社より)

等の機械の普及によって、次第に行われなくなったと言われています。その他、聞き取り調査を裏付けるように、カッテの床下から囲炉裏、ダイドコロの床下からカマドがそれぞれ確認されました。これは、金子忠男家文書で明治25年の「萬覚古来記簿改」という古文書に描かれた当時の部屋割り図面と符号するもので、大変興味深い発見といえます(図4)。このうち、特に囲炉裏の外枠は、河原石と古代瓦の破片を積み上げた構造体をしていて、本来、武蔵国分寺の造営に用いられたはずの古代瓦が、近代家屋の建築部材として転用されている有り様は、国分寺市域の旧家ならではの地域的様相と捉えることが出来ます(写真③)。なお、明治15年前後に建てられた旧

主屋でしたが、発掘調査ではこれより以前に存在していた前身建物の痕跡も見つかっていて、この土地が江戸時代にも既に宅地として利用されていたことが判りました。

従前、種類が異なる文化財は、それぞれの専門領域での立場から調査が行われるのが常でしたが、今回の一連の調査は、古文書・民具・建造物・考古資料といった様々な文化財が相互に関連して、地域の歴史解明に大きな役割を果たすことが改めて認識されました。まだ、現地での緊急的な保護措置を図ったのみで、古文書の解読はもとより、民具や発掘調査の出土遺物等の詳細な分析を行っていないため、教育委員会では、今後調査の学術的な成果をまとめていく予定です。

(依田 亮一)

【用語解説】

棹縁天井 (さおぶちてんじょう)

棹縁と呼ばれる細木を並べ、これと直角方向に板を並べて張った天井。

差鴨居 (さしがもい)

鴨居(引き戸の上にある溝付きの横木)のうち、特に構造材の機能を兼ねる背の高いもの。

長押 (ながし)

柱を横に繋ぐ長い化粧材。位置によって内法長押、天井長押などと呼ばれる。

根太天井 (ねだてんじょう)

二階の床裏を天井として扱ったもので根太(床板を受ける横木)を棹縁の代わりに使われているもの。

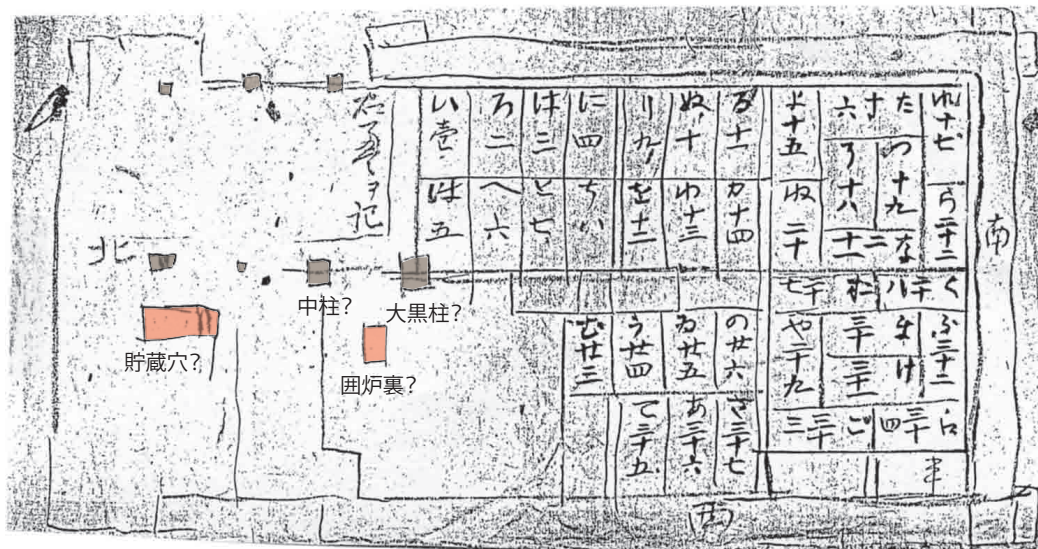


図4 明治25年 「萬覚古来記簿改」(金子忠男家文書)に描かれた主屋建築当時の部屋割り

中柱以北が土間、囲炉裏があった周辺は板間、大黒柱以南の5間は畳敷で、その東・南・西には縁が巡っている様子がわかります。また、土間周辺の礎石や、囲炉裏・貯蔵穴状?の施設も描かれています(大黒柱左上の注記は、「右畳ヲ記」)。

企画展示



50年前の商店を歩く ―国分寺駅北口 駅前通り沿いの商店街―

今夏、7月20日から9月1日まで、武蔵国分寺跡資料館では、夏季企画展「50年前の商店を歩く―国分寺駅北口 駅前通り沿いの商店街―」を開催しました。企画展では昭和30年代～40年代の駅前通り（国分寺駅前から北に延びる商店街）の写真、また、駅前通りの商店で実際に販売されていた商品を展示しました。このころは、地元の個人商店が並んでいた全盛期として思い出すことができます。

今回、北口の商店街を取り上げた理由は、国分寺駅北口の再開発事業に伴い、駅周辺地区の商店街の風景がガラリと変わりはじめたからです。

再開発事業では、国分寺駅北口に交通広場を設置し、ビル二棟を建設する計画で、平成25年度には駅前商店の一部と住宅の解体・除却、そして新たな開発へ向けての整地・仮設工事がはじまります。

今夏までに、再開発予定地域内の商店は、移転あるいは閉店となりました。数年後には、駅前商店街が再編成されます。

商店街は人々の生活の中でなくてはならないものですが、各々の商店の歴史やその立地について気に留めることはほとんどありません。例えば、自分が慣れ親しんだ商店街や個々の商店の10年前、20年前の風景を覚えているでしょうか。人の記憶はあいまいで、店の位置や存在自体すら忘れていくことが多くあります。このことから、市内の風景を時代ごとに記録するため、何年かおきに同じ位置で写真撮影等を行っていく必要性を感じます。

国分寺駅北口の商店街が形成され始めたのは甲武鉄道（現在のJR中央線）が明治22年（1889）に新宿―八王子間が開通し、国分寺駅が開設されたときからです。

図のように、昭和35年時の商店街地図を見ると、だいぶ北まで個人商店がくまなく続いています。

国分寺市に残された50年前の写真からは、サンダルで買い物をする人も多く見受けられ、近隣に住む人たちが日常の生活物資を購入するための通りであったことがわかります。

かつて、北口商店街には昭和32年に開店した国分寺百貨店（昭和59年にバザールKと名称変更）があり、各専門店が同じ建物内にあったので、必要なものはそこで全て手に入れられる頃もありました。この百貨店は平成18年に閉店となっています。

再開発事業が始まるこの機会に、いま一度国分寺における商店街の歴史を振り返り、国分寺の商店の特徴や

魅力はどのようなものか、考えてみてはいかがでしょうか。

（米村 創）



写真① 国分寺駅北口ロータリー東側の日本通運 電車で運ばれた荷物は、国分寺駅ホームに隣接している日本通運でさばいて配達されました。昭和49年



写真② 市制当日 国分寺百貨店の様子 市制施行を祝して花束が飾られています。また、東京オリンピックが開催された年でもあり、五輪が描かれた提灯も飾られています。昭和39年



写真③ 新道のT字路から南を望む 左に見える芳賀電気屋の写真は珍しく、このショウウィンドウにあったテレビのプロレスが人気でした。右側にはバッティングセンターがあったようです。昭和40年

国分寺駅

竹重玩具	富山ホーン	増田洋行	サワキ洋行	福栄クツ	田中薬局	新海写真	神山モーター	新道	楠田ヤ	補田ヤ	芳賀電キ	雑貨店	多摩商事	島田木材	内野家具	ハウイ	三谷ヤ	朝日新聞	チドリ	浅見肉	こまや	チエリ	中華	美松	交番
魚基	鈴木時計	大沢クツ	浅見製麺	真栄堂パン	清水牛乳	吉野	三菱銀行	森田ヤ酒	板谷文具	北田商店	国分寺	百貨店	大栄建設	郊外土地	矢野ヤ	多摩薬局	保科リハツ	果物店	まつだ	松月堂	西通り	柳屋旅館	食堂		

下田工業所	玉屋米店	忠家具	はとや洋品	原力パン	池田金モノ	のんき	角田食品	たのくら	清月	長峯フロン	石川クツ	古川時計	島田薬局	星野教材	坂本	城本	金内フロン	下田トラク	ストア	かねだか	田中商店	千代鶴	魚源	百足ヤ	サイドウ
白山房	本多薬局	関口風呂	関根玩具	佐伯	松田ミシン	加園玩具	木村ヤパン	三旗	長峯	井口傘ヤ	多摩中央	妻屋具服	市倉青果	まるみ	幸進トウ	石川屋	坂本洋品	中村製菓	スシヤ	八百幸	尾崎金物店	ひつじヤ	テラ	清水商店	清水木材店

青柳菓子	飯田	飯田米店	飯田ハキモノ	連雀	高井商店	陸奥ヤ	魚屋	昭栄堂ワタ	みどりヤ	中野ラジオ	大島リハツ	シン	岩下庵	おりつる	古山文具	中村商店	吉野園	大和ヤ	大フロン	尾崎金物店	ひつじヤ	テラ	清水商店	清水木材店	
増田工ム店	モータス	神山	自轉車	り用水	加登屋	粕谷園	山崎製作房	澤田ヤ酒	野崎硝子	山口モータ	浅見酒店	熊野神社通り	竹内トーフ	玉ヤ商店	外山商店	池田酒	一心堂								

図 昭和 35 年 11 月現在の国分寺駅北口 駅前通りの商店街地図



写真④ 魚基前の交差点を南から望む 八百屋や魚屋で女性たちが買い物しているところから、夕飯前の日常の風景がわかります。 昭和 33 年



写真⑤ 中村製菓、坂本洋品、石川屋食料品の並び 市制施行祝賀の商店街の風景です。万国旗が掲げられています。 昭和 39 年



写真⑥ 金内ふとん店から南を望む 昭和 33 年には民主書房という本屋、またその向い側にはなみき衣料店があったことがわかります。 昭和 33 年



写真⑦ 駅前通りと連雀通りの交差点から南を望む 市制施行を祝賀する通りの様子です。右側の加登仙でお菓子を販売する様子がわかる写真です。 昭和 39 年

Events

秋季展示「武蔵国分寺金堂跡調査について(仮)」

秋季展示「第34回こくぶんじ写真コンクール」



今年の秋季展示は、史跡武蔵国分寺跡の金堂跡調査の流れを紹介する展示と、第34回こくぶんじ写真コンクール入賞作品展示の2本立てです。国分寺の古代のロマンと新たな魅力を探しに来てください。

【展示会場】武蔵国分寺跡資料館 企画展示室

【展示期間】平成25年10月26日(土)から12月1日(日)まで(予定)

「おたかの道湧水園」無料公開



「おたかの道湧水園」を開園記念日と国分寺まつりに合わせて、無料公開いたします。当日は武蔵国分寺跡資料館にも無料で入館できます。

【無料公開日】10月18日(金)、11月4日(月・祝)

「民俗資料室」特別開館 屋外展示



通常は観覧に事前の申込みが必要な「民俗資料室」を一日開館し、屋外では特別展示をいたします(雨天時は屋内展示のみ)。

【特別開館日】11月9日(土)

【開館時間】午前10時から午後4時まで

歴史講演会「武蔵国分寺と古代の鳩山(仮)」



武蔵国分寺跡で出土した瓦および、武蔵国分寺瓦の生産地である鳩山窯跡群(埼玉県比企郡鳩山町)の発掘調査成果を中心に講演会を開催します。

【日時】平成25年11月10日(日)午前10時~12時(開場午前9時30分)

【会場】本多公民館大ホール 【定員】250人 【参加費】無料

【講師】渡辺 一氏(大東文化大学講師)

有吉重蔵(国分寺市教育委員会/国士館大学講師)

【申込み】10月16日~11月8日まで電話又は直接ふるさと文化財課窓口へ 西元町1-13-10 ☎042-300-0073

史跡ガイドボランティアによる史跡武蔵国分寺跡周辺ガイド



国分寺まつりの開催にあわせ、各地点に待機したボランティアによる史跡の解説をお聞きいただけます。

【解説日時】11月4日(月)午前11時から午後3時まで 【参加費】無料

【解説地点】武蔵国分僧寺跡金堂跡・武蔵国分僧寺跡七重塔跡・国分寺楼門・真姿の池湧水群

武蔵国分寺跡資料館ご利用案内



交通のご案内

※駐車場はありません

【電車】JR国分寺駅下車/徒歩約20分 JR西国分寺駅下車/徒歩約15分

【バス】国分寺市循環バス『ぶんバス』日吉町ルート「泉町一丁目」下車/徒歩約8分
国分寺駅南口より「京王バス」系統番号<寺83>・<寺85>乗車「泉町一丁目」下車/徒歩約8分

開館時間

午前9時~午後5時(入館は午後4時45分まで)

休館日

毎週月曜日(祝日・振替休日の場合はその翌日)
年末年始(12月29日から1月3日まで)
※展示替えなどで臨時休館することがあります。

入園料

資料館に入館するには「おたかの道湧水園」への入園料が必要になります。(入園券は史跡の駅で販売)
一般……………100円(年間パスポート1,000円)
中学生以下……………無料

【入園料の減免規則があります】

- 1) 学校の教育活動で生徒(中学生を除く)、学生及び引率の教職員が入園するとき〔事前(5日前まで)に減免申請書の提出が必要です。〕
 - 2) 身体障害者及びその介護者が入園するとき〔発券窓口の史跡の駅で身体障害者手帳等の提示が必要です。〕
 - 3) その他教育長が特別の理由があると認めるとき〔事前(5日前まで)に減免申請書の提出が必要です。〕
- ※減免申請書は、国分寺市のホームページからダウンロードできます。



モバイルホームページQRコード